リオン・フォイヒトヴァンガーの小説『成功』におけるヒトラー像について

―20年代の証言の一つとして―

奥　田　敏　広

（1）

『成功』についてのいくつかの自作解説の中でフォイヒトヴァンガーは，「バイエルンの国の運命を形象化すること[1)]」がこの小説のテーマであり，そういう意味ではいわば「バイエルンの国が私の小説の本来の主人公である[2)]」，という趣旨のことを繰り返し述べている。ただし，この小説を実際に読めばすぐわかるように，ここで言う「バイエルンの国」とは，たとえば郷土文学作家ガングホーファーらの描く牧歌的な国，森と湖と素朴な少女たちのオーバーバイエルンのことでもなければ，「イーザル河畔のアテネ」と呼ばれた，宮廷を中心とする華やかな芸術の都，パウル・ハイゼやレンバハ，ヴァーグナーらのミュンヒェンのことでもないし，プロイセンの皇太子に「プロイセン野郎[3)]」と怒鳴りつけたという女将カティー・コーブスの経営する芸術家酒場「ジンプリツィシムス」らにボヘミアンたちが集まっていた，粋で自由な，そして前衛芸術の中心であったシュヴァービングのことでもない。そうではなくて，小説『成功』の中に描かれている「バイエルンの国」とは，トラーらを中心とするレーテ共和国の崩壊後，一転して反動的右翼運動の中心となっていった，そしてその結果「他のドイツが重荷と感じていた[4)]」1920年代前半のバイエルンのことであり，「ある州の３年史」というこの小説の副題は，具体的に言うなら，1921年から24年にかけてのバイエルンの歴史を指している。フォイヒトヴァンガーと言えば，何といっても，１世紀におけるユダヤ人の運命を扱った厖大な『ヨーゼフス３部作』らを中心とする歴史小説が有名であるが，『成功』は，そういうこの作家の作品の中では比較的数の少ない，ほとんど同時代といえる時代を直接の素材としている小説の一つである。

ところで，そういう1920年代前半における「バイエルンの国の運命を形象化」

しようとする場合，今日の視点から言えば，ヒトラーと国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）の初期の運動，例の1923年11月8日から9日にかけてのミュンヒェンのビアホール「ビュルガーブロイケラー」における蜂起で頂点に達した右翼民族主義運動の展開に，当然多少なりとも触れないわけにはいかないと思われる。実際また『成功』の中では，ルーペルト・クツナーという男が，敗戦，莫大な賠償を強いるヴェルサイユ講和条約，ドイツ経済の心臓部であるルール工業地帯のフランス軍による占領と続く一連の外交的屈辱，およびそれに伴い文字通り天文学的数字に達したインフレ，恐ろしい食料難といったような内憂外患の中で，これらの言語に絶した不幸の原因はすべてユダヤ人と共産主義にあるのだとする「天才的に単純な方法[5]」で，最初はビアホール「ツム・ガイスガルテン」の数人の仲間を，そして次第に一般の女性や若者や小市民たちの人気を獲得していく様子が描かれている。そしてクツナーの率いる党「真のドイツ人」の運動も，この小説の骨格となる物語である美術史家マルティン・クリューガーの冤罪裁判において有罪の決定的証拠となる偽りの証言をする運転手ラッツェンベルガーや，この裁判の弁護士ガイアー博士の息子であるエーリヒ，そしてこの裁判の陪審員の一人で，この小説の8人の主人公たち[6]の一人である古物商カイエターン・レヒナーなどを通して，詳しく描かれている。この「きちんと分けた頭髪とちっぽけな口髭[7]」をした，そしてビアホール蜂起の際には，「朝には，ドイツ国家主義革命か，あるいは私の死が見られる[8]」という例のカッコイイ演説をするクツナーという人物にはヒトラーのことが，ハーケンクロイツを旗印とする「真のドイツ人」という党にはナチスのことが，踏まえられていることは間違いない。ちなみに，この小説にはクツナーの兄としてボクシングのチャンピオンであるアロイスという人物も登場するが，現実のヒトラーの母違いの兄もアロイスという名前である。

こういう内容を指して，たとえば，アメリカにおけるフォイヒトヴァンガーの秘書で，彼の死後もマルタ夫人を助けて彼の遺稿や遺品を管理することになるウォールドウ女史などは，「『成功』は最初の反ヒトラー小説であった」と述べている[9]。彼女がここでどういう意味で「最初」という言葉を使っているのか，つまり，そもそも文学界全体において最初であると言いたいのか，フォイヒトヴァンガー個人に関して最初であると言いたいのかは，前後の関係を見ても判明しないが，少なくとも，現代におけるフォイヒトヴァンガー研究の中心となっているモーディックやシュテルンブルク，ピシュルらもさかんに強調するように，[10] この

小説の執筆期間（1927年末から1930年5月[11]）の段階で，ヒトラーとナチスの初期の運動に照明をあてたという点は，フォイヒトヴァンガーの功績として大いに高く評価すべきである，と一応は考えるべきであろう。というのも，これは後に巨大な存在となったヒトラーの前史という観点から当時の歴史を考えがちな今日の我々の見誤りやすい点であるが，1920年代前半には，一方においては少なくとも世紀転換期にまで溯るヴァンダーフォーゲル運動らを源泉の一つとする幅広い反近代主義運動の流れがあり，他方また復員兵や大幅に縮少された国防軍から除隊された兵員らによって雨後のたけのこのごとく発生した傭兵団や義勇軍も存在しており，それらは複雑に分派していたのであって，『成功』の執筆時期にあたる20年代後半においてもまだナチスは，モーディックの言うように「ほとんど政治的意味をもっていない[12]」ほどではないにしても，右翼の中心としての地歩を固めていた，とはどうも見なせないからである。

共和国体制がこの時期にもまだ安定していた，というのではもちろんない。レンテンマルクの発行により驚異的なインフレを脱却して経済が相対的安定期に入った1924年に始まるいわゆる黄金の20年代においてさえ，「共和主義者のいない共和国」などといわれたヴァイマル体制はそれこそ左右両陣営のラディカルな批判に晒されていたが，20年代も終りに近付くにつれて，不気味な暗雲はますます重く社会に被さりだしていた。あのマレーネ・ディートリヒが本格的にデビューした1928年5月のレヴューの題名『何か起こりそうだ』は，そういう雰囲気を象徴的に伝えているし，当時そのシニカルな時代批判によって享楽の世界都市ベルリーンの寵児となっていたエーリヒ・ケストナーは，ゲーテの詩のパロディー『君よ知るや，大砲の花咲く国を？』において，当時のドイツの軍国精神を皮肉っている。そういう中で，1929年5月1日にはベルリーンで，メーデーのデモ隊の一部が時のプロイセン州社会民主党政府の命令により警察によって射撃を受け，何人かの死傷者を出した血のメーデー事件が起こっている。23年以来初めての政治流血事件である。29年はまた世界恐慌の年であり，翌30年2月には路頭に迷う失業者が250万にも達して，黄金の20年代は決定的な終幕を迎える。

しかしながら，ナチスが決定的に大きな政治勢力となるのは，すでに『成功』が完成していた30年9月14日の総選挙（650万票を獲得して議席数107の第2政党になる）においてのことであり，しかも，このとき躍進したのはナチスだけではなく，議席を54から77に増加させた共産党も自らを選挙の勝利者だと見なしていた。一方，ちょうど『成功』の執筆期間中にあった前回の28年5月20日の総

選挙の段階では，ナチスはわずか12議席に過ぎず，これはもちろん第1党の社会民主党（153議席）と比べて比較にならないのみか，同じ右翼のドイツ国家人民党（30議席を失ったもののなお73議席を維持していた）のわずか約$\frac{1}{6}$である。[13] たとえば，かつてのレーテ共和国の指導者の一人で，20年代後半には月刊誌『ファナール』によってアナーキズム運動を展開していた詩人エーリヒ・ミューザームは，34年7月10日にオラーニエンブルクのナチス強制収容所で虐殺されることになるが，[14] そういう彼でさえと言うべきか，そういう彼故にと言うべきか，ともかく彼も30年9月の総選挙の後でさえまだ，「フーゲンベルクがドイツにおけるファシズム運動の実際の指導者である[15]」と述べているのである。あのフーゲンベルク・コンツェルンの総師で国家人民党の党首であった人物をファシズムの大立者とするミューザームの見方は，さすがに30年代に入ってからの意見としては，当時でも多少奇異な感じを与えたのであろうが，20年代後半には，こういう見方が圧倒的な大勢を占めていたことは間違いない。

こういう状況にあった20年代末期の段階ですでに，23年の蜂起で頂点に達したヒトラーとナチスの初期の運動を，相対的安定期（1924－28）に入る前のインフレや食糧難，外交危機という状況と結びつけて展開してみせた『成功』は，深刻な危機に入りつつあるヴァイマル共和国への不吉な，しかし正確な予言と警告として，その先見の明に富んだ炯眼が高く評価されるのもまた当然のことなのかもしれない。しかし，はたしてほんとうにそうなのであろうか？

本稿において私は，横軸として1920年代の社会の状況を，縦軸としてフォイヒトヴァンガーという作家の歩みを目盛とする座標軸を設定することによって，この座標軸の上で上記の問題の占める位置を検証しつつ，最終的には小説『成功』におけるクツナー＝ヒトラーをめぐる描写を綿密に分析することによって，この問題が持っている背景と意味を多少なりとも明らかにしたいと思うのである。

まず次の章では，私の設定する座標軸の横軸である20年代におけるヒトラーと当時のドイツ社会の関係を，もう少し詳しく考えてみたい。

（2）

さて，最初からいささか唐突で乱暴ではないかという印象を与えるかもしれないが，23年のヒトラーの蜂起が当時の一般の人々にどのように受け取られていたかということを考えるにあたって，次のことはやはり根本的前提として踏まえておかねばならないと思われる。つまり，前章で述べたように，20年代のドイツに

は無数の複雑に分派した右翼民族主義団体が存在しており，ヒトラーとナチスはその中で必ずしもず抜けた存在ではなかったというのは確かに一面の事実ではあるものの，また反面，第1次大戦におけるドイツ軍の最高責任者の一人であり，引退してからも国防軍や右翼全体のいわば象徴的存在であったルーデンドルフも参加した23年のビアホール蜂起は，やはり何といってもそれなりに知られてはいただろうし，したがってまた，ルーデンドルフの盟友である元伍長の人物にも，すでに当時からそれなりの関心は向けられていたであろう，ということである。

たとえば，最近出版されたフォイヒトヴァンガー夫人(マルタ)の回想録によれば，当時夫妻はまだミュンヒェンに住んでいたが，すでにビアホール蜂起の以前からヒトラーという演説の名手のことは，彼らの友人たちの間でも話題になっていたという。[16] 夫妻はまた，ナチスの集会にはもちろん参加したことのないものの，おそらくナチスの機関紙を通してのことであろう，ヒトラーの演説の「文法的に正しくないドイツ語」も当時からすでによく知っていたという。[17] そして，ビアホール蜂起のあった11月8日から9日にかけての真夜中3時ごろには，夫妻は『ベルリーナー・ターゲブラット』紙の寄稿者である友人のレーオンハルト・アーデルトからの電話で叩き起こされている。ヒトラーが蜂起して，すでに主要なユダヤ人を逮捕しだしている。駅も占領されてしまっているので，自分の自転車を貸してあげるから即刻それで逃げるように，というのである。[18] ユダヤ人の一人としてフォイヒトヴァンガー夫妻が，ヒトラーの動きに多少過敏になっていた面もあろうが，アーデルトの慌てぶりから考えても，当時のミュンヒェンの一般市民にとっても，ヒトラーの蜂起は少なくとも一つの事件ではあったろうと思われる。

もっとも，とはいってもすでに非常な高齢（回想録が出版された1983年の時点では93才）に達しているマルタ夫人のこの証言には，回想録というものが一般に不可避的に持たざるをえない傾向，つまりこの場合なら，当時は同等の権利をもって存在していたかもしれない多くの右翼テロの中で，後に巨大な存在となるヒトラーの蜂起だけを取りあげてそれを過大評価するという傾向が，普通の回想録の場合以上に強い可能性もあり，これだけを，当時の状況を判断する上での目安とするのは危険であるのもまた事実である。しかし，当時共和国の中で半ば独立国のような観を呈していてヒトラーの蜂起の舞台となったバイエルン州においてのみならず，繁栄と享楽の世界都市であった共和国の首都ベルリーンにおいてさえ，23年当時のヒトラーの運動は，すでにその当時からそれなりに有名であった

ことを証言する，当時の資料もまた存在している。

たとえば，首都ベルリーンで出版されていたヴァイマル期を代表する左翼的週刊誌で，クルト・トゥホルスキーらの主要活動舞台であったあの『ヴェルトビューネ[19]』誌には，奇しくも蜂起当日にあたる23年11月8日号にすでに，『カール，ヒトラーとユダヤ人』と題するミュンヒェンにおけるユダヤ人弾圧に関する記事と，各連が「おーい，ハーケンクロイツ」に始まる『バイエルンの行進歌』と題する諷刺詩が掲載されている。[20] 同誌は，その後も何回かヒトラーに関する記事を載せているが，[21] たとえば，蜂起に対する裁判の公判が行われていた最中にあたる24年3月6日号には，『ヒトラー裁判』と題する，裁判の詳しい傍聴記まで載せている。[22] すでにルーデンドルフの名前ではなくヒトラーの名前が見出しに使われているという事実一つを見ても，この元伍長が首都ベルリーンにおいてさえ当時すでに相当有名であったことがわかるのである。また，あのゲオルゲ・グロスとジョン・ハートフィールドの発行する雑誌『プライテ』のヒトラー蜂起のあった23年11月に出た第8号には，おそらく愛国主義を標榜するヒトラーに『ニーベルンゲンの歌』のジークフリートを皮肉っているのであろう『ジークフリート・ヒトラー』と題する，あのおなじみのちょび髭の顔に，裸で毛が茫々と生えた上半身と，ハーケンクロイツの入れ墨をした腕を描いたヒトラーの絵が載っている。[23]

やはり，23年の時点ですでに，ヒトラーの運動はドイツ全体でもそれなりに有名であったと見なさなければならないのであり，その蜂起をいわば現場で（ミュンヒェン）体験したフォイヒトヴァンガーが，それを彼の小説の中で取り上げること自体は，一面から言えば，炯眼でも何でもなくてむしろ当然のことだと言わねばならないであろう。

ただし，これが1番重要な問題なのであるが，私が先ほどから，23年当時ですでにヒトラーはそれなりに有名であったという際に，「それなりに有名」という言葉を繰り返し使ってきたことに注意をしてもらいたい。つまり，私はそれによって，当時ヒトラーは一風変わった演説家としてさかんに人々の話題になっていたものの，彼の実際の政治的力量や意味はまだほとんど真剣に問題にされなかったのではないか，ということを暗示したかったのである。

そもそも23年のビアホール蜂起は，最初こそ成功の見込みをヒトラーらに抱かせたものの，結果的にはみじめな敗北に終っている。なるほど，最初ビアホール「ビュルガーブロイケラー」においてヒトラーが，当時のバイエルンを支配して

いた3人の人物，前州首相で今や州総監となったフォン・カール，バイエルンに駐屯する国防軍をベルリーンの共和国政府の罷免にもかかわらず依然として指揮下においていたフォン・ロッソウ将軍，州警察長官フォン・ザイサーの3人に銃を突き付けながら彼らから全面協力の約束を取り付ける一方，レーム大尉の率いる部隊らが，バイエルンにおける国防軍指令部と州総監官邸を包囲したところまではうまく行っていた。しかし，先の3人がちょっとした隙を利用して言葉たくみにビアホールを抜け出し，ただちにそれぞれ蜂起鎮圧に奔走した結果，近郊の国防軍が続々とミュンヒェン市内に集結しだすと，形勢はにわかに不利になる。半ば絶望した形で，しかし市民の協力に最後の望みを託しながら，そしてまたかつての英雄ルーデンドルフにまさか国防軍が銃を向けることはないだろうという甘い考えから，ヒトラーら約2000人がビアホールを出て市内を示威行進しだすが，一行はフェルトヘルンハレ付近における州警察との最初の衝突で，圧倒的多数の彼らにいとも簡単に鎮圧されてしまう。示威行進の一行の中には，最初の銃声を聞いただけであたふたと逃げ出すような連中もたくさんいたのである。ヒトラーも，その場はなんとか逃れるものの，すぐにまた逮捕されている。

これは，現代における代表的なヒトラー伝の一つであるトーランドの『アドルフ・ヒトラー[24)]』の中の蜂起当日の模様についての記述のごく簡単な要約であるが，フォイヒトヴァンガーが，20年代後半の時点で『成功』の中で描いている事実も，基本的にはこれと同じである[25)]（もちろん，その詳しい分析は後の第(4)章で行う）。こういう顚末であるから，最初のビアホールでのでき事を知らない一般のミュンヒェン市民には，蜂起はなんなく鎮圧されたと思われたに違いない。先に言及した蜂起当夜真夜中のフォイヒトヴァンガー夫妻への警告の電話にしても，夫妻はそれを無視してそのままま た寝入ってしまったというが，[26)] これなども多分ごく普通の市民の反応の仕方を代表していたのであろう。

こういう23年11月のビアホール蜂起が，当時すでに首都ベルリーンにおいても「それなりに有名」になったのは，当時のいわゆるマスコミ・大衆文化が大いに関係していたものと思われる。こういう当時の社会の様相についても，小説『成功』の中では，たとえばこの小説の骨格となるクリューガー裁判の弁護士ガイアー博士が暴漢に襲われたという新聞記事に関する，勤め帰りのサラリーマンや当時流行のテニスラケットを持った少女たちがひしめくベルリーンの地下鉄内での彼らの雑談を通して描かれているが（「彼らは階段を登って外に出ると，もう新聞報道のことは忘れていた[27)]」），こういうなんといっても無責任で軽薄なところ

のいなめない当時のすでに多分にジャーナリスティックな社会状態は，当然そのヒトラー観にも影響していたと考えねばならない。実際，一風変わった元伍長の，しかもビアホールを舞台としていたといういかにもミュンヒェンらしい蜂起事件は，確かにマスコミで大いに重宝であったに違いない。たとえば，イリア・エレンブルクの伝えるヒトラー蜂起事件当時のベルリーン市民の反応は，そういう当時のヒトラー観をよく表わしている。

> だれにも知られているルーデンドルフ将軍と，まだほとんど人に知られていなかったヒトラーが政権を掌握しようとした。悲劇の下稽古は「ビール暴動」という，むしろ茶番狂言にふさわしい名前で歴史に書きこまれた。ベルリン市民は，ミュンヘン発の報道をどこ吹く風といった顔で走り読みしていた。また一つ暴動，レーム大尉，ヒトラーとかいう男……。[28]

そして，繁栄と享楽の黄金の20年代の中で，ヒトラーの蜂起事件は，当然のことながら色褪せていく。「新聞記事の中心はセンセーショナルな殺人事件とか映画スターたちの行状にうつった[29]」からである。

こういう状況においては，攻撃すべき保守反動の中心は，カールやロッソーという政治家や軍人たちで，ヒトラーの実際の政治的力量は，あまり問題にされなかったという観がぬぐえない。ヒトラーは，20年代を通じてまだ，主に右翼の「太鼓たたき（Trommler）[30]」，つまり，もっぱら人気と士気を高めるのに重宝な反動勢力の道具として見られていたにすぎないのではないか，と考えざるをえないのである。

たとえば，先にも言及した『ヴェルトビューネ』誌の24年3月6日号のヒトラー裁判傍聴記[31]は，そういうヒトラー観を例証している。ヒトラーに続いて登場した，蜂起に参加した人間の一人で成功した際にはバイエルン州首相に就任する予定だった前警視総監エルンスト・ペーナーについて，傍聴記は次のように語っている。

> ここで語っているのは政治家であり，扇動者ではない。これが，舞台裏に黒幕として立っていた人物である—ヒトラーではなくて彼が，バイエルンにおける民族主義的政治の実権をその手に握っていたのである。

また，同誌の23年11月15日号には，『誰が一揆の金を払っているのか？』という小見出しで，反共和国活動を続けている「ルーデンドルフ氏」に今だに年金を払い続けたり，罷免したにもかかわらずロッソー将軍と彼の兵隊たちにあいかわらず俸給を支払っている（これは，この記事によれば，共和国政府の大蔵大臣ルッター博士の意向によるという）共和国政府に対する激しい攻撃が載せられており，それは，「そしてこのようにしてこれからもこの国は，自らに対して企てられる一揆に対して金を払い続けるであろう」という辛辣な言葉で締め括られている。[32] 共和国政府が今の体質を改めないかぎり，第2第3のヒトラーがたえず現われ続けるだろうというのであるが，これは逆に言うなら，ビアホール蜂起のヒトラーという人物自体には，ことさら問題にすべき重要性がないということなのである。

こういう「太鼓たたき」としてのヒトラー観をいまだにひきずっていたと考えられる，しかし社会には大きな変動のきざしが現われていた，つまり世界恐慌の影響を受けて不況と失業が深刻な問題となりつつある一方，ナチスが今回は中央政界の議会内勢力としてしだいに勢力を伸ばしつつあった20年代末期に，フォイヒトヴァンガーは，かつての一地方のしかも失敗に終ったヒトラー蜂起を，彼の小説『成功』の中で取り上げようというわけである。これは，まさにその取り上げ方と描き方いかんによって，混迷を深めつつあった社会に対する先見の明に富んだ警告になる可能性も確かにあるが，一方また，ヒトラーの過小評価という当時の一般の傾向をかえって助長することにさえなりかねない危険もある，と言わねばならないであろう。まさに，『成功』におけるクツナー＝ヒトラーをめぐる描写が問題になってくるわけである。

しかし，次章においてはまず，私が第（1）章で設定したもう一つの座標軸であるフォイヒトヴァンガーの作家としての歩みの中で本稿における私のテーマの持つ意味と位置を測定するという作業を，先におえておかねばならないであろう。

（3）

フォイヒトヴァンガーが，ベルトルト・ブレヒトときわめて親密な関係にあったことは周知の事実である。なかでも，当時すでにミュンヒェンの著名な劇作家，劇評家であったフォイヒトヴァンガーに『スパルタクス』の原稿を見てもらうべく訪れた青年ブレヒトが，横柄にも，自分はこの作品をそれほどいいとは思わない，実は『バール』のほうがいいのだが，と言ったという二人の出会いの話は有名である。[33] この『スパルタクス』は，『夜打つ太鼓』と題名を変えられ，1922

年9月29日にミュンヒェンのカマーシュピーレで上演され，ミュンヒェン中の注目を集めることになるが，その際斡旋の労をとったのがフォイヒトヴァンガーであり，彼はいわばブレヒトの発見者の一人と言える。これを機縁に，ブレヒトはゲオルゲン通りにあったフォイヒトヴァンガーの家をしばしば訪れるようになり，二人の最初の共同作品『エドゥアルト2世の生涯』が生まれている。その後24年9月にはブレヒトが，翌年にはフォイヒトヴァンガーもベルリーンに移住するが，ブレヒトはあの『三文オペラ』の大成功によって，フォイヒトヴァンガーは『ユダヤ人ジュース』の世界的成功によって，[34] 二人ともそれぞれヴァイマル期を代表する屈指の作家となっていく。ブレヒトには，ロマーニッシェス・カフェーに出入りするゲオルゲ・グロスやヘルツフェルデ兄弟，そして何よりもあのヴァルター・ベンヤミンらの新しい友人たちができていくが，フォイヒトヴァンガーとの関係も続いている。フォイヒトヴァンガーの亡命先である南仏の漁村サナリーを，ブレヒトはわざわざデンマークのスヴェンボルからしばしばたずねているし，後に亡命作家たちが集まったアメリカのカリフォルニアでも当然二人はいっしょになり，再び共同作品『シモン』が生まれている。

こういうフォイヒトヴァンガーとブレヒトのきわめて密接な関係について，前章でも言及した最近出版されたマルタ夫人の回想録は，この二人の巨人の最も身近にいた人間しか知らないような，数々の興味深いエピソードを伝えている。たとえば，彼らがまだミュンヒェンにいたころ，アウクスブルクで製紙工場を営むブレヒトの父親が，自分の息子には作家になる才能があるだろうかと相談に来て，フォイヒトヴァンガーの説明に納得して，これからも送金を続けるといって帰って行ったというようなこともあったらしい。[35] しかしブレヒト自身は，こういういわば恩人であるフォイヒトヴァンガーにも最初から遠慮などは全然せず，きわめて挑発的でさえあったという。たとえば，ブレヒトは彼を「スプリングボード」として利用しているに過ぎないと外で吹聴して回っている，などという噂がフォイヒトヴァンガーの耳にも届く。一方これに対して，フランク・ヴェーデキントやミューザーム，マックス・ハルベと並ぶミュンヒェンのワイン酒場トルゲルシュトゥーベの常連で，フォイヒトヴァンガーの親友である一方，トーマス・マンにもきわめて近い人物であったブルーノ・フランクなどは，自分かブレヒトのどちらかを選ぶように，とフォイヒトヴァンガーに詰め寄ったりした。そこで，フォイヒトヴァンガーがブレヒトを呼んで「スプリングボード」の件を詰問すると，ブレヒトは驚いたことにそれを否定しない。しかし，それから二人は全然別の仕

事のことを熱心に話合いだし，最後にはそもそも何のために二人がその時会うことになったのかをすっかり忘れている始末であった，という。[36]

おそらくブレヒトは，彼が傍若無人に突き付ける激しい議論を真剣に受けとめ真摯に答えてくれる「フォイヒトヴァンガーおじさん」を，嘲弄をこめつつも愛しており，また必要ともしていたのであろう。[37] 一方フォイヒトヴァンガーもまた，この14才年下の若い友人の激しく挑発的な一途さを，その刺激を愛していたものと思われる。フォイヒトヴァンガーの遺稿の中にでてくる次のエピソードは，そういう二人の関係の微妙なニュアンスをよく伝えている。一つのコンマをめぐって，それを必要とするフォイヒトヴァンガーと，いらないとするブレヒトが争ったのである。

> ブレヒトは声高になって叫びだした，彼は議論の際にはじきに叫ぶのであったが，それが彼を興奮させた。低声の話を好む私も声高になった。外では召使いが，主人たちがなぐり合いを始める前に間に入るべきではないかと尋ねていた。夜の12時過ぎのこと，ブレヒトが私の家の側を通り，口笛を吹いて私を窓際へ呼び出し，こう言明した，あなたが正しい，僕はコンマを置きます，と。[38]

それにしても，ブレヒトとの密接な関係という点から，実際素直にそう信じられていることさえあるようだが，フォイヒトヴァンガーをコミュニズムと単純に結びつけて考える視点が，案外見られるようである。しかし，「マーガリン小男爵」などとミュンヒェンの新聞に書かれたこともある[39]富裕な市民家庭の出身であったフォイヒトヴァンガーは，あのトーマス・マンがことあるごとに強調する市民的人文主義と個人主義的自由の伝統に深く根をはった，いわゆる教養市民の末裔の一人なのであって，そもそもブレヒトとは違い，生涯を通じて共産党に入党したことは一度もない。これは，1980年代前半に彼の生誕100年を記念して出版されたいくつかの西独の伝記[40]の描くところであるのみならず，以前から東独の研究者たちも認めている[41]根本的事実である。たとえば，第1次大戦の際にもフォイヒトヴァンガーは，後半にはハインリヒ・マンなどの影響もあり平和主義を唱えるものの，最初は決していわゆる反体制の反戦派ではなかったのである。その後のレーテ共和国成立の時にも彼は，革命を「指導的人物たちの近く」で体験したと強調しているものの，[42] 彼がその時実際にどういう行動をとったのかは，今のところ具体的にはほとんど明らかにされていないようであるし，[43] 当時の彼の

作品『トーマス・ヴェント』には，あのゲーテの「行動する者はいつも良心を持っていない。観察する者だけが良心を持つ」という言葉がモットーとして掲げられ，直接的な行動に出て社会のダイナミズムに飲み込まれて行くことへの深刻な憂慮が表現されている。[44] この時期の彼の姿については今後の詳しい研究が待たれるわけであるが，少なくとも，彼が何の躊躇もなしに革命にアンガージュマーンしていった，とはどうしても考えられないであろう。

もっとも，その後20年代に彼が，ブレヒトとの関係などを通じてコミュニズムへある程度近付いていったのは事実である。ただし，その際にも彼は，コミュニズムに対して抜き難い不信感と懐疑を実際には捨てきれなかったのではないか，と私は考えている。こういう20年代における彼の「革命的な流行[45]」であったコミュニズムとの関係を考える上で大きな手がかりとなるのが，本稿の素材でもあり，ブレヒトを８人の主人公たちの一人で自動車エンジニア兼詩人の共産党員カスパー・プレックルとして登場させている，20年代末期に成立した小説『成功』である。

プレックルは，やせた顔にするどい目をした，きわめて激しい性格の人物で，バンジョーを片手に，「日常生活やちっぽけな人間のでき事[46]」を題材とした自作のバラードを歌う詩人である。ブレヒトとの明らかな相違も確かに持っているこの人物をめぐる描写が，一種のブレヒト論としてどういう意味と価値を持っているかは別として，[47] ブレヒトのいわばトレードマークでもある「革ジャンバーを着て革のハンチング帽をかぶっている[48]」というこの人物に，ブレヒトのことが少なくとも踏まえられていることは間違いない。そして小説『成功』は，その骨格をなす物語である冤罪裁判の被告であるクリューガーの「唯一のほんとうの友人[49]」としてこういうプレックルを登場させることによって，現代における個人主義的芸術の運命は精神分裂病以外にはなく，すべての芸術活動はただそれがいかに階級闘争に貢献しうるかという観点からのみ評価されるべきだとするコミュニズムの視点を，その作品内部に導入している。

こういうところから，たとえば東独の研究者ピシュルなどは，「とにかくすでに，一人の市民作家のマルクスとの対決がドキュメントされているのであって，これがなければ，小説『成功』の合理主義的社会分析は不可能であったろう[50]」と述べている。確かに，『成功』の骨格をなす物語である冤罪裁判の被告であるクリューガーの「唯一のほんとうの友人」として登場するプレックルの現代における個人主義的芸術の運命に関する煩悶と決断[51] は，小説全体にとっても重要

であることは間違いない。しかしながら私は，この小説のもう一方において確かに描かれている，そしてピシュルも「このマルクスの引用は批判的なものではあるが[52]」という留保によって認めている，コミュニズムへの深い懐疑の方をむしろ我々は注目しなければならないのではないか，と考えるのである。

たとえば，プレックルという人物には，一方でブレヒトの女性関係やその日頃の傍若無人さが強烈にカリカチュア化されているのみならず，拘置所に面会に来たこの「唯一のほんとうの友人」に，クリューガーは次のような辛辣な言葉をあびせている。

> あなたは，かわいそうな人間だ。あなたは，他人に感情移入することができない，他人に共感することができないのだ，それ故それを人工的に作ろうとする。あなたは，私よりも10倍も厚い壁の向こうにすわっている。あなたは，異常に自己中心的である。　＜中　略＞
> 画家フランシス・ゴヤは確かに革命家だった，しかし，それはまさにゴヤが他の人々以上に，共感と喜びを感じていたからに他ならない。ゴヤには，今日のコミュニストの厳格主義や，彼らのみじめで虚偽の似非科学性はまったくない。[53]

ここに見られる，フォイヒトヴァンガーのいわゆる俗流マルクス主義的理解の浅薄さを批判することは容易であろうが，これはあくまで一登場人物の言葉であって，そのままフォイヒトヴァンガー自身の見解なのではない。しかもこれはクリューガーが，今度の冤罪裁判は彼の非政治性を改めさせる機会になるという点で好都合である，などと語るプレックルの「自己中心的」態度に腹を立てたあまり暴発させた非難でもある。しかし，とはいっても一方，このゴヤ研究者という疑いもなくフォイヒトヴァンガーが多少の自己像を投影させて描いている人物[54]の言葉には，やはり何といってもフォイヒトヴァンガーのコミュニズムに対する抜き難い不信感が，そしてきわめて親密な人間（ブレヒト）故に，その批判が半分的外れであることをはっきり意識しつつもあえておこなうといったニュアンスが，紛れもなく読み取れるように，私には思われるのである。

さらにこの小説には，フォイヒトヴァンガーが30年代に接近することになる革命後のソヴィエトに対しても，次のような辛辣な言葉が見られる。

人々は，たいへん教条主義的であり，たいへん百姓じみて狡猾である。わが国（バイエルンのこと）の人々と，ある種の類似性がある。[55]

これは，プレックル＝ブレヒトの勤める自動車コンツェルンの社長で，「第５番目の福音史家」と呼ばれる不気味な人物の発言であるが，この発言を必ずしも等閑に付すことができないことは，この人物がプレックルに嘲弄を込めながら非常な関心と好意を示し，一方プレックルもまた彼を非常に憎みながらも妙な愛着と対抗意識を感じているという，二人の奇妙な関係からも明らかである。

しかし，こういう関連において最も重要だと考えられるのは，この小説の終り近くで，８人の主人公たちの一人である作家ジャック・トューヴァーリーンが，マルクスの11番目のフォイエルバッハテーゼを念頭に置きつつ行う，次のような一種の宣言とでも言うべき発言である。

ある偉大な男，この男をあなたは嫌いであるし私も嫌いなのだが，カール・マルクスというこの男が，次のように言っている。哲学者たちは世界を説明してきたが，問題は世界を変革することである，と。私個人としてはこう信じている，世界を変革する唯一の方法は世界を説明することである，と。世界を納得のいくように説明すれば，世界は静かな方法によって，活動を続ける理性によって変革される。世界を力によって変革しようと試みるのは，世界を納得のいくように説明できない連中だけである。この騒々しい試みは長続きしない。私はむしろ静かな試みを信じている。偉大な帝国は滅び，よい１冊の本は残る。私は，機関銃よりもうまく書かれた紙を信じている。[56]

作家の生産手段も，マス・メディアというかたちで支配階級の手に握られている今世紀において，自分は「階級のはざま[57]」に位置するなどと主張する作家トューヴァーリーンのこの美文調の文章にみられる，あまりにも素朴に理性を信じるオメデタサは言うまでもない。ただし問題は，あくまでこういう考えに基づき，トューヴァーリーンが『バイエルンの書』という作品を完成するという事実である。ピシュルも認めているようにフォイヒトヴァンガーの自伝的要素が最も多く取り入れられている人物であるトューヴァーリーンのこの作品が，小説『成功』自体のことであることは，この小説を注意深く読めば明らかである。本稿の冒頭で引用した，『成功』の主題は「バイエルンの国の運命」であるという作者自身

の解説も思い出してもらいたい。つまり換言すれば，上記の引用文が，小説『成功』自身のいわばモットーと言えるわけである。『成功』における冤罪裁判を中心とする20年代の社会批判は，こういう尋常といえばあまりにも尋常な人文主義的理性の視点からなされているのであって，それは，コミュニズムの階級闘争の立場とははっきりと一線を画すものなのである。したがってまた，本章の冒頭で言及したブレヒトとの友情も，こういう思想的な根本的相違の上に立って，にもかかわらず続いていったと見なすべきものであろう。

しかし，30年代に入るとまた状況は変わってくる。ヒトラーを独裁者とする第三帝国が成立し，多くの反体制知識人，芸術家たちが亡命を強いられるが，彼らは，その作品の発表の場という問題一つを取っても，明らかに非常に困難な状況におかれることになる。彼らの多くが著名人であったとはいえ，故国を離れた人間はその受け入れ国においてはしょせん余計者であるという根本的事実に変わりはなく，作家にとって作品の発表の場がないという事態は，彼らの生活そのものの根底とも深くかかわってくると言わねばならない。こういう状況の中で，亡命作家フォイヒトヴァンガーは，思想的にコミュニズムにより近付くというよりも，むしろ政治的にソヴィエトおよび共産党により近付くことになる。これは，周知の，というよりもむしろ悪評高いとでも言うべき一つの事実であるが，たとえばその顕著な現われの一つとして，1936年7月から1939年3月までモスクワ（38年末からはパリにも編集部がおかれる）で出版されていたあの有名な月刊文学雑誌『ダス・ヴォルト』への編集者としての彼の精力的な関与がある。同誌とフォイヒトヴァンガーとのかかわり合いについては，同誌のリプリント版が出版されてまもなくの70年代初頭の長橋芙美子[58]の研究からもその一端が窺われるが，現在では，亡命文学研究の中心人物の一人であるH・A・ヴァルターや，ソヴィエトと東欧にあるアルヒーフの厖大な資料を駆使したパイクの，精緻な実証的研究[59]によってさらに詳細に知ることができる。

たとえば，表向きあくまで反ファシズムの統一人民戦線を標榜する『ダス・ヴォルト』誌が，その実ソヴィエト共産党やコミンテルンといかに密接な関係にあったかは，同誌との深いかかわり合いが具体的に跡付けられている次のような人々の顔ぶれを見てもあきらかである。すなわち，フォイヒトヴァンガーと並ぶ編集者であるヴィリ・ブレーデルとブレヒト，後に東独の文部大臣となるいわば筋金入りの共産党員で，『ダス・ヴォルト』誌の成立に奔走した『インターナツィ

オナーレ・リテラトゥーア』誌のドイツ語版編集者ヨハネス・R・ベッヒャー，そのベッヒャーの推薦で『ダス・ヴォルト』誌の編集部に入り，名目は「書記」であったが，何といっても遠くにいる2人の編集者（南仏サナリーのフォイヒトヴァンガーとデンマークのスヴェンボルのブレヒト）や37年はじめにモスクワを離れたブレーデルに代わってモスクワで実質的な編集にあたったフリッツ・エルペンベック（フォイヒトヴァンガーはルートヴィヒ・マルクーゼを推薦していたらしいが，彼はベッヒャーの推すこの人物に敗れた[60]）などである。実は，フォイヒトヴァンガーらの他にマン兄弟にも『ダス・ヴォルト』誌の編集者への要請があったが，慎重居士トーマスは言うに及ばず，人民戦線という看板を掲げる以上ぜひとも不可欠だということで執拗に勧誘を受けたハインリヒでさえ，「我々がコミュニズムの雑誌を創り，そこで我々の受け入れ国に反する宣伝を行っている」という非難に口実を与えることは賢明でないとして，それを受諾しなかったのみならず，同誌への寄稿さえずっと行わなかったくらいである。[61]

はたせるかな，創刊後まもなく，反ファシズムの統一戦線を模索する『ダス・ヴォルト』誌は非常な試練にたたされることになる。あのスターリンによる36年8月に始まる粛清裁判と，いわゆるジッド事件である。これらが，不安定な境遇の中で混迷を続ける亡命作家たちにいかに大きな恐怖と動揺を与えたかは容易に想像できるであろう。実際たとえば，パリで刊行されていた亡命週刊誌『ダス・ノイエ・ターゲブーフ』の1937年2月第6号では，エーリヒ・アンダーマンが『モスクワの魔女裁判』と題して，スターリンによる粛清を中世のヒステリックな魔女裁判にたとえている。[62] 同誌の主催者レーオポルト・シュヴァルツシルトなどは，スターリンがヒトラーよりも少しもましでないこと，つまり「一方の独裁者は他方の独裁者の双子の兄弟であるという確信[63]」さえ抱くにいたり，以後決定的にソヴィエト共産党と袂を分つことになる。

そういう中で『ダス・ヴォルト』誌の編集者フォイヒトヴァンガーは，決定的に旗幟を鮮明にする，というかせざるをえないことになる。すなわち彼は，ルートヴィヒ・マルクーゼらと36年12月1日から翌年の2月6日まで初めてソヴィエトを訪問してスターリンとも2時間にわたり会見する一方，その印象記『モスクワ1937年』や，『ダス・ヴォルト』誌の37年2月号に掲載された，ジッドの『ソヴィエト紀行』に対する書評『ソヴィエト連邦における審美家』を執筆することによって，スターリン擁護反ジッドのキャンペーンの一翼を担っていくのである。本稿のテーマ上残念ながらこの問題を詳しく論じることはできないが，『ソヴィ

エト連邦における審美家』においてのフォイヒトヴァンガーの主張は，一言でいうなら，ジッドの批判は，退屈のあまりちょっとその「象牙の塔」を抜け出した傲慢で気まぐれな「審美家」が，「あまりにもするどい目で何千というちっぽけな不公平や没趣味」をあげつらい「全体の偉大で高貴な計画性」に盲目であるに過ぎない，というものである。[64] 「象牙の塔」の「審美家」には，トイレで新聞紙を使うようなソヴィエトの現状にもがまんがならなかったのだろうなどという，いささか泥仕合の様相も帯びてきているこの議論の是否はともかくとして，こういうフォイヒトヴァンガーのアーンガジュマーンが，コミンテルンやソヴィエトにとって，共産党員でない市民作家さえ今日では，しかも実際にモスクワをその目で見た上で彼らの陣営に馳せ参じているという願ってもない宣伝材料になる一方，戦後ほぼ30年にもわたって西独でフォイヒトヴァンガーが決定的に忘れさられる[65]大きな原因の一つになったことは間違いない。

「俗物主義の宣教師」トーマス・マンのいわゆる転向もかつて痛烈に批判したことのある辛辣なクルト・ヒラーは，フォイヒトヴァンガーなどは「ジッドのような人間のタイプライターの埃を払う（säubern＝粛清する）値打ちもない精神の位階に属する」と当時くそみそにけなしているが，こういう非難やフォイヒトヴァンガーは共産党から金をもらっているのに違いないなどという中傷に比べれば，これよりかなり後の1941年７月24日付けのヘルマン・ケステン宛の手紙の中で，すでにアメリカに渡っていた『モスクワ1937年』の作家についてアルフレート・デーブリーンが述べている次の言葉などは，なるほどそれなりに辛辣な批評ではあるものの，あるいはかなり冷静で公平な見方と言わなければならないのかもしれない。

> 当地で希望的意見を述べているのは，フォイヒトヴァンガーだけです。彼はウルトラオプティミストです。はっきりわかりませんが。近ごろ私が彼に，私はどのような独裁者も拒否する，つまり右翼の独裁者も左翼の独裁者も，と言ったとき彼はこう言いました，あなたは何も恐れる必要はない，左翼のドイツにおいては，ハインリヒ・マンと彼―フォイヒトヴァンガーが，何を印刷し何を印刷しないのかを決定するのだ，と。[66]

「Links－Deutschland（左翼のドイツ）」という言葉によってデーブリーンが当時のどういう陣営を指しているのか，この文章からだけではわからないが，ハイ

ンリヒ・マンと彼の良識によって，左翼ラディカリズムの暴走にブレーキをかけるというのは，フォイヒトヴァンガーの発言として十分考えられることである。同じユダヤ人で共にヴァイマル期を代表する作家でありながら，アメリカにおいて対照的に恵まれなかった作家デーブリーンの嫉妬も少しはあるかもしれないが，スターリンを讃美する「ウルトラオプティミスト」という批判は，何といっても等閑に付すことはできないであろう。

ただし，こういう反ファシズム戦線におけるフォイヒトヴァンガーのソヴィエト共産党への接近をもってして，この人文主義的啓蒙と個人主義の伝統から出発した教養市民の生涯が，コミュニズムへの道へ直線的に限りなく近付くものであったとする東独のピシュルらの見方はどうであろうか。現代における西独のフォイヒトヴァンガー研究の中心となる担い手の一人モーディック[67]も言うように，そのためには少なくとも，フォイヒトヴァンガーが晩年死ぬまでアメリカに留まり，東独どころかヨーロッパにさえ帰らなかった，という事実が納得のいくよう説明されなければならないであろう。そういう意味で，アメリカにおけるフォイヒトヴァンガーの歩みについても今後の詳しい研究が待たれるわけであるが，現在でもたとえば他の亡命者たちのさまざまの発言やアメリカの学者カーンの報告[68]などから，その一端は窺い知ることができる。

なるほど，ヘルマン・ケステンのフォイヒトヴァンガー家訪問のいささかイローニッシュな報告[69]が伝えているように，11000冊の蔵書や広大な庭園を持つ「お城」に住み，次々に作品を発表していったフォイヒトヴァンガーのカリフォルニアにおける生活環境と創作者としての境遇は，ブレヒトやデーブリーン，ハインリヒ・マンら多くの亡命作家たちは言うに及ばず，ルートヴィヒ・マルクーゼが「あらゆるドイツ亡命者の皇帝」であると言ったトーマス・マンさえ羨むほどのものであったことは確かである。[70] しかし，この『モスクワ1937年』の作家を資本主義諸国の盟主国の一つがしょせんそっとしておくわけはなく，フォイヒトヴァンガーには彼も尊敬していたルーズヴェルト大統領夫妻の好意が向けられていたとはいえ，『タイム』誌などの民間のジャーナリズムのみならず，非アメリカ的活動に対するカリフォルニア調査委員会会長ジャック・B・テニー上院議員らの激しい攻撃が彼に対してなされている。しかも，これはまだ戦争中のことで，その後戦後の東西冷戦下で例のマッカーシー旋風が吹き荒れると，彼に対する風あたりもはるかに強くなる。カーンによれば，彼のアメリカ国籍申請に対して，1948年3月5日には彼の「忠誠」に関するきびしい尋問がなされているが，それ

は彼の死の約1ケ月前にあたる58年11月24日まで続けられ，しかも結局まだ認可はされなかったという。[71] こういう事実一つを見ても，彼のおかれていた境遇のきびしさが容易に想像できるのである。そういう中で，フォイヒトヴァンガー家でのイヴニング・パーティーの常連であった人々（ブレヒト，チャップリン，トーマス・マンら）も，理由は必ずしもマッカーシー旋風だけではない場合もあるが，いずれにせよヨーロッパへ次々と帰っていく。しかしフォイヒトヴァンガーは，上記のようなきびしい態度をとられながらもアメリカ国籍の申請をやめないのみか，アメリカ国籍のないまま国外にでれば帰国できなくなるかもしれないという危険を考慮して，彼自身一方では希望しており，実際また何度か提供されたヨーロッパ旅行のチャンスを断わってさえいるのである。[72]

ちなみにカーンは，こういう事実から，フォイヒトヴァンガーはドイツ人亡命作家たちの中でヨーロッパ帰還を真剣に考えなかった唯一の作家だと結論している。[73] いささか乱暴な結論という観はまぬがれないが，いずれにせよ少なくとも次のような疑問は残るであろう。つまり，きびしいマッカーシー旋風のただ中で，しかも彼のいわば苦楽を共にしてきた友人たちがあるいはヨーロッパへ帰り，あるいは亡くなったりする（ブルーノ・フランク）中で，フォイヒトヴァンガーがあえてカリフォルニアに留まった理由は何だったのだろうか，ということである。なるほど戦後も彼は，ソヴィエトや新生東ドイツに対して，さまざまな機会に讃辞を送り続けている。しかし，「太平洋岸のこの親切でおだやかな隠者[74]」には一方また，すでに20年代から関係の浅からぬ，[75] 自由とアメリカンドリームの国への愛着が，あるいはひょっとして，共産党独裁下での創作活動に対するいささかの不安はなかったのだろうか？　本稿のテーマ上ここでもまた残念ながら問題提起の形で終らざるをえないが，少なくともこういう問題は，フォイヒトヴァンガーの生涯をコミュニズムへの接近として直線的にとらえる見方の恣意性と安直さを暴露していると言わねばならないであろう。

（4）

それにしても，焦点のぼやけた要約に落ち入る危険を覚悟の上であえて前章でフォイヒトヴァンガーの歩みを概観してきたのであるが，それは第(1)章でも述べたように，本稿におけるテーマがこの作家においていかなる意味と背景を持っているのかということを，多少なりとも明らかにしたかったからに他ならない。つまりそれは，あえて一言で言うなら，独裁者という非難を必ずしも否定するこ

とのできないスターリンという人物を後に擁護することになるこの「ウルトラオプティミスト」が，20年代後半においてはほんとうに炯眼という功績に価していたのだろうか，ということであり，また，一方において不信と懐疑を確かに持ちながらもコミュニズムに少なからぬ関心を示し，実際そこに接近もしたこのブレヒトの親友が，これはヴァイマル時代のいわゆる左寄りの知識人のヒトラー観の一例として非常に興味深いものであるが，後に右翼陣営のカリスマ的存在となるヒトラーをまださまざまの右翼団体が存在していた20年代後半の時点で具体的にどのようにとらえていたのか，ということなのである。

ところで，なるほど1931年10月17日のナチスの機関紙『フェルキッシャー・ベオバッハター』に載った「彼は未来の亡命パスポートを十分手に入れた」という小説『成功』に対する不気味な言葉[76]を見ても，この小説がナチスにいかに不快感と警戒感を与えていたかはわかる。また，ヒトラーとバイエルンの伝統的保守勢力の区別を明確にしていない，第(2)章で述べたような蜂起当時の『ヴェルトビューネ』誌の諸記事とは対照的に，『成功』においては両者の区別がはっきりと描かれている。つまり，ヒトラーにとって，バイエルンは単なる足がかりに過ぎず，問題は銃後の一突でドイツを屈辱と奈落の底に落としてしまった「11月の犯罪人たち」たるベルリーンの共和国政府を転覆することにあったのに対して，カールらの狙いは，バイエルンを共和国から独立させてヴィッテルスバッハ家の王国を復活させることにあるのであって，両者が互いにそういう相手の腹を知りつつ相手にだし抜かれはしないかと戦々兢々としている姿が，この小説では詳しく描かれている。ちなみにカールはフランツ・フラウヒャーという名前で登場しているが，彼は全体としては確かに否定的人物であるものの，蜂起鎮圧に奔走する場面だけはかなり肯定的に描かれてさえいる。こういう区別は，たとえば社会民主党を「社会ファシズム的（sozialfaschistisch）」として第1の攻撃目標としていた当時の共産党の姿勢[77]に典型的に現われているような，分裂訌争を繰り返し，右翼に対しては十把一絡的な認識を持ちがちであった左翼陣営の姿勢を念頭におくなら，確かにその洞察力を評価するべきものであろう。

なるほどまた，敗戦，屈辱的講和，フランス軍によるドイツ最大の工業地帯の占領と続く対外ショック（もっとも『成功』によるなら，ルールといっても一般名詞としての赤痢のことしか念頭に浮かばない人々がバイエルンには多くいたらしく，[78] 右翼による宣伝の効果も大きかった），そして対内的には，文字通り天文学的数字に達したインフレのせいで年金や貯金は何の値打ちもなくなりそれこそ

今日食べるものにも困るという人々が多数出るというような状況においては，クツナー＝ヒトラーの「天才的に単純な方法」，つまりそれら複雑な現象の責任はすべて国際的ユダヤ人と共産主義にあるのだという説明が，ビアホールの煙草の煙の充満する中でビールを飲みながら不満をぶつけあう人々にいかに説得力のある恐ろしい効果を持ちうるのかということが，この小説においては単に理論としてではなく，小市民たちの実際の生活を通してリアリスティックに描き出されている。「$\frac{3}{4}$レントナー[79]」などと呼ばれる（彼らの財産では1リットルのビールも買えないから）こういう小市民たちの姿は，8人の主人公たちの一人である古物商のカイエターン・レヒナーを通じて，彼の生活と夢と失望を通じて造形化されているのである。たとえばまた，名前を中世から借りてきた「フェーメ裁判（Feme）[80]」というナチスのテロが，いかに彼らに都合の悪いというだけで何の関係もない人々さえ残酷に巻き添えにすることがあるかということも，この小説の中では具体的な設定のもとに描きだされている。しかも重要なのは，モーディックも強調しているように，[81]『成功』においてはクツナーの蜂起の失敗が，決して決定的かつ永久的敗北として描かれているのではない，ということである。この小説はまた，拘置所や裁判所におけるクツナーの人気も印象的に描いており，最後には「ルーペルト・クツナーの短い収監は，刑罰というよりも保養であった[82]」と結論しているのである。

しかしながら，これらすべてのするどい洞察に富んだ，そしてリアリスティックな描写にもかかわらず，『成功』におけるクツナーをめぐる描写には，どこか迫力と深刻さの不足とでもいうべき面が私には感じられてしかたがないのである。その理由をこれから具体的に説明していくわけであるが，まずはクツナーの運動の周辺から見ていきたい。

クツナーと「真のドイツ人」の運動に対しては大企業が，たとえば第(3)章でも言及したプレックル＝ブレヒトの勤める自動車コンツェルンの社長などが，名前は伏せてあるものの，多額の献金をしている。大資本が赤化防止の対策の一つとして右翼運動に献金するというのは一般によくあることであり，このこと自体はあまり問題ではない。ただし，こういう献金が，ルール工業地帯の利権をめぐるフランス企業家との交渉の推移によって，途中で突然ストップする。つまり，フランス企業との妥協によって，「真のドイツ人」の強硬な排外国粋路線がドイツの企業家にとって突然じゃまになりだしたのである。一方「カリフォルニアのマンモス」と呼ばれるアメリカの大企業家が，レヴュー『もうこれ以上高くはな

らない』（当時の短いスカートを皮肉っている）の中で使われて世界的ヒットとなったソング『闘牛士の唄』を機縁にしてトューヴァーリーン＝フォイヒトヴァンガーと知り合い非常に意気投合して，彼の願いを受けて財政援助をバックにバイエルンの反動政治に一部介入することになる。そして，このドイツ国内とアメリカの二つの経済界の動きを受けて，バイエルン州総監フラウヒャー＝カールがクツナーと完全に袂を分ちその弾圧にのりだしたことが，「真のドイツ人」の蜂起が失敗することになる根本的，そして決定的理由だという風に小説『成功』は描いているのである。

こういう見方が歴史的事実とはたしてどういう関係にあるのかということは，本稿における私のテーマとはあまり関係がないのであって，問題は，フォイヒトヴァンガーが20年代末期の段階で，ヒトラーの蜂起の失敗をあくまでそういうものとして描いている，という事実である。たとえばこれをミュラー＝フンクは，「政治的な諸事件は経済の変動の単なる結果として現われている」のであって，「経済的基盤の優性に関するマルクス理論の前提」に完全に添うものである，[83]としている。しかし，そうだろうか？

そもそもここでの作者による「真のドイツ人」と大企業の取り上げ方は，「経済的基盤の優性に関するマルクス理論」を踏まえているというよりも，むしろ多分にジャーナリスティックな面が強いように私には思われる。たとえば，1923年11月15日号の『ヴェルトビューネ』誌に『誰が一揆の金を払っているのか』という小見出しの記事が載っていることはすでに述べたが，すでにその記事の中にも，アメリカの自動車王ヘンリー・フォードなどとのヒトラーの関係が指摘されている。[84] こういうすでに20年代前半に一般に存在していた，ヒトラーを大企業の「太鼓たたき」とする見方を，フォイヒトヴァンガーが単に踏襲しているに過ぎないのではないだろうか。現にこの小説の中でもクツナーはしばしば「太鼓たたき」と形容されており，これは『成功』におけるクツナー像を考える上で，一つの大きな目安になると言わねばならないのである。

それにまた，アメリカからの援助の役割をマルクス理論における「経済的基盤」と言うには，市民的芸術家トューヴァーリーンと「カリフォルニアのマンモス」の個人的関係が，ここではあまりにも大きな役割を演じすぎているのではないだろうか。私にはむしろ逆に，前章で述べたように後にカリフォルニアに骨を埋めることになるフォイヒトヴァンガーの，アメリカの一企業家の善意はドイツの反動勢力の鎮圧に決定的な力となりうるというそのリベラリズムに対する信頼が，

早くもここに表われているのではないか，と思われるくらいである。

一方，『成功』におけるクツナーをめぐる描写には，マルタ夫人が「笑止さ」という言葉で表現して[85]いるような一種滑稽とでも言うべき要素が確かにある。たとえば，あのハーケンクロイツは実はインドの性的シンボルであったのに，ドイツの古代学者シュリーマンがフランスの同僚に騙されてきわめてアーリア的事物だと信じこまされたところから，そういうものとしてドイツに広まったというエピソードがこの小説の中では詳しく紹介されているが，それ以後は，「真のドイツ人」の集会やそこでの服装を描写する際にハーケンクロイツが何の説明もなくただ「インドの多産の印」とだけ呼ばれている。これは，リアリズムではなくカリカチュアであるが，このカリカチュアは，アーリア人の純血と清潔を説く「真のドイツ人」のイデオロギーの欺瞞性を暴露すると同時に，純粋に滑稽さとしても作用していることは否定できないであろう。

こういう傾向は，クツナー自身の描写においてはいっそう顕著である。つまり，クツナーはもっぱらさまざまなビアホールにおける演説者として登場しており，その際「俳優」としての彼の工夫と努力が強調されている。たとえば，クツナーはコンラート・シュトルツィングというミュンヒェン国立劇場のかつての名優から，演説やその時のポーズについて個人指導を受けていることになっているのであるが，クツナーが熱弁をふるう演説の描写はそれを皮肉って，たいてい次のような言葉で締め括られている。

> このように25年前宮廷俳優コンラート・シュトルツィングは，イギリスの劇詩人シェイクスピアの登場人物であるマルク・アントンの役を演じて，ローマ人たちにカーユス・ユリウス・カエサルの死体を示したのであった。[86]

これもまたリアリズムではなく，カリカチュアである。たしかにモーディックなどは，こういうカリカチュアもまた有効に作用しているのであり，フォイヒトヴァンガーは『成功』においてヒトラーをちゃかすことによってナチスの脅威と危険性を見誤るという過失を犯している，というしばしば繰り返される非難はあたらないとしている。[87] なるほどカリカチュアも，滑稽さという作用だけでなく，すぐれた諷刺としての機能も持つことは確かである。しかし，この小説に登場する８人の主人公たちのクツナーに対する反応もまた，レヒナーを除けば圧倒的に滑稽という要素が強いのである。

たとえば，バイエルン政界におけるフラウヒャー＝カールのライバルである一方，作家トューヴァーリーン＝フォイヒトヴァンガーの友人でもある法務大臣オットー・クレンク博士は，「真のドイツ人」を非バイエルン的な「プロシア式軍国主義[88]」と考えているばかりではなく，「我々は一度彼の精神状態を調べさせる必要があるのではないか[89]」と言って最初からクツナーを本気で相手にしようとはしない。なるほどクレンクは後にふとしたことから失脚し，クツナーの片腕として「真のドイツ人」の運動に参加するようにはなる。しかしそれは，彼を失脚させた「ばかげた，恩知らずの[90]」バイエルンの人々に復讐するため，つまり，明らかに「笑止な党[91]」にバイエルンを売り渡しバイエルンを破滅させるためなのである。協力しながらも彼は，「真のドイツ人」は「ヨーロッパの悲劇」の中の「コメディアン役[92]」に過ぎないと考えている。そして，名門出身の貴族的なクレンクと「臆病者[93]」のクツナーがしょせんうまくいくはずはなく，結局クツナーは蜂起の前に脱党し隠遁してしまう。しかもなおクツナーは，まだ未練がましくクレンクに復党してくれるように懇願しに行き，簡単に断わられる始末なのである。

こういうクレンク脱党の起因となった蜂起延期事件の描写もまた，この小説におけるクツナー像を象徴していると言わねばならない。つまり，クツナーは以前から春にはベルリーンに行進するのだと仲間にも民衆にも約束していたにもかかわらず，その時になると時機尚早だとしてそれを延期するのだが，問題は，その延期の本当の理由を説明するフォイヒトヴァンガーの動機付けの仕方である。クツナーの母親が鼻水をたらしおいおい泣きながら，こんなことをしていてもうまくいくはずはない，ポアンカレは彼を殺してしまうだろうと，息子を思う一途の心から半分わけのわからないことを言ってクツナーに泣きつく。クツナーは，その場ではくだらない話としてこれを相手にしないが，後々もこのでき事は彼の心を離れず，それが蜂起延期の主要原因になったというのである。これは，あまりにも平凡な母と子の姿，むしろ臆病な息子の姿だと言わねばならない。この場面は明らかにフォイヒトヴァンガーの虚構である（ヒトラーの母親クララは，実際には1907年12月21日に死んでいる）ことを考えるなら，彼の描きだそうとしたクツナー＝ヒトラー像の特徴も自ずからわかると言わざるをえないのである。

（5）

『モスクワ1937年』の作家に対して西ドイツでは，すでに第(3)章でも言及し

たように，戦後30年近くにもわたってほとんど沈黙が守られてきた。そもそも，全集は言うに及ばず，彼の代表的な作品さえほとんど出版されていなかったのである。それが最近，ようやく1975年に東ドイツのアウフバウ書店の許可版としてフィッシャー書店から出版された小説『成功』の好評もあり，[94] 84年の生誕100年祭までにはどうにか彼の主要な小説の出版も一応は揃うようになる一方，亡命文学研究の進展や100年祭を機縁にして，フォイヒトヴァンガー研究がやっと本格的にはじまりつつある。そういう研究の中心となる担い手の一人であるモーディックやシュテルンブルクらは，これもすでに第(1)章で述べたことであるが，フォイヒトヴァンガーの政治的な認識の甘さを問題にするかつての古いフォイヒトヴァンガー観[95]に対して，本稿のテーマである『成功』におけるナチスの扱い方を出してきて彼の先見性と洞察力を高く評価しようとしている。一方おもしろいことに，以前からずっとフォイヒトヴァンガーに対して一般に好意的な東ドイツの批評は，ピシュルらの例外もあるが，この点に関してむしろ伝統的に批判的なようである。たとえばクレンペラーやディールゼンがそうであるが，[96] こういう見方に大きな影響を与えているものの一つに，あのブレヒトの意見があると思われる。ブレヒトの『作業日誌』によれば，彼はカリフォルニアにおいてしばしばフォイヒトヴァンガーとヒトラーについて論じあっているが，そのつどフォイヒトヴァンガーのヒトラー過小評価に反論している[97]のである。

私は，今まで述べてきたことを考えてもらえばわかるように，この点に関して基本的に後者の見方に立つものである。ただし，私はこの点におけるフォイヒトヴァンガーのヒトラー像を必ずしも否定的にのみとらえようとは思わないのである。それはまず第1に，これは消極的な理由に過ぎないが，そもそも20年代末期の段階で，フォイヒトヴァンガーのあのようなヒトラー像を誰が正当に非難できただろうか疑問に思うからである。第(1)章で引用したミューザームの発言に典型的に表われているように，多くの知識人が右翼の運動に対して十把一絡的な認識を持ちがちであった中で，フォイヒトヴァンガーのヒトラー像はそういう一例に過ぎないのみか，部分的にはむしろ，前章で詳説したように卓越した洞察力さえ示しているのである。

しかし，私が『成功』におけるフォイヒトヴァンガーのヒトラー像を必ずしも否定的にのみとらえたくない第2の，そしてこれが積極的な主要理由であるのだが，第2の理由は次の点にある。すなわち，このヒトラー像には疑いもなくある種のオプティミズムが存在しているが，そのオプティミズムは，少々過酷な現実

に直面すると絶望に急変してしまうようなものでは全然なく，筋金入りとでも言うべきオプティミズムだからである。ヒトラーを笑止だとする彼の根本態度は，ヒトラーが実際に第三帝国の独裁者に伸し上がり，その後も当初の予測を裏切って，すぐに没落するどころかヨーロッパ全土を席巻しつつあるときにも何ら変わるところはない。反体制知識人としてもユダヤ人としてもまっ先に亡命を強いられたフォイヒトヴァンガーは，『成功』を第1作とする厖大な3部作『待合室』（今は「野蛮の理性に対する一時的勝利[98]」の時で，やがてくる理性の永遠の勝利のための待機の時に過ぎないとする彼の確信が籠められている）らの仕事を旺盛に進める一方，その「あとがき」（1939年）の中で『成功』におけるヒトラー像について次のように述べている。

> 理性に対する愚鈍の反乱に，そしてその指導者たちに，混和している笑止さを私が非常に強調したことは，ひょっとしたら大胆なことだったかもしれない。しかし，＜中略＞個々のでき事の意気消沈させる憂鬱さにあまりにも強く拘泥しすぎない者なら誰でも，多くの個々のでき事がいかに血なまぐさく恐ろしいものであるにせよ，この戦いにはいわば最初から高度の喜劇性が付随していたことを認めるに違いない。[99]

この発言がはっきり示しているように，フォイヒトヴァンガーのヒトラー像に存在するオプティミズムは，自らのオプティミズムを明確に自覚した，そして「いかに血なまぐさく恐ろしい」多くのことを彼自身体験しようと何ら変化することのないいわば筋金入りのオプティミズムなのである。そういう意味で，これはもはや普通のオプティミズムとは言えないのであって，デーブリーンが言ったのとはまた少し違う意味で，つまり，まさにいい意味においても悪い意味においても，ウルトラオプティミズムとでも言うべきであると私には思われるのである。

さらにこの後フォイヒトヴァンガーは，彼の亡命生活における最大の危機を体験することになる。すなわち，ドイツのフランス侵攻により，彼はフランスで収容所に入れられてしまうのである。そこを彼は，それを知ったルーズヴェルト大統領夫妻らの救出運動によって，直接的にはマルセイユのアメリカ副領事H・ビングハム・ジュニアらの助力によって脱出し，ピレネー山脈を越えスペイン・ポルトガルを経て船でニューヨークに到着する。これは，あのベンヤミンがスペインに向う途中ピレネー山中のスペイン人部落において，フランスに送還しゲシュ

タポに密告するという恐喝を受けて服毒自殺することになるルートと同じであることを考えれば，フォイヒトヴァンガー自身が，「いかに血なまぐさく恐ろしい」ことを実際に体験しなければならなかったかよくわかるであろう。アメリカの学者カーンは，フォイヒトヴァンガー救出にかかわったビングハム副領事やW・シャープにインタビューしているが，彼らは二人ともフォイヒトヴァンガーの「魂の強靭さ」に強烈な印象を受けたという。[100)]

こういう体験をしながらもフォイヒトヴァンガーは，ナチスを笑止だとする彼の根本的態度をなお何も変えようとはしていない。ニュルンベルク裁判に関する彼の次の発言は，このことをよく表わしている。

> 彼らが被告席についている今，これらの個々の人間の卑小さと，かれらがひき起こした災いの際限のなさとの間にある，非常なそしてグロテスクな対立が明らかになる。ナチズムと集中的に取り組んできた者には，この笑止な対立は当初から明らかであった。しかし世界は，このような巨大な成功の背後に，このようなちっぽけで憐れむべき連中が立っていることを，どうしても信じようとしなかったのである。[101)]

「このようなちっぽけで憐れむべき連中」がなぜ「巨大な成功」をおさめえたのか，という考察がここでは確かに十分にはなされていない。実際また，少なく見積っても500万人には達するユダヤ人を虐殺したヒトラーの言語に絶した犯罪を考えれば，この発言がユダヤ人たちの間で決してこころよく受け入れられなかったのも当然である。が，一方また，30年前後においては警告としての役割をあまり果たさなかったと考えざるをえないフォイヒトヴァンガーのこういうナチス観が，戦後のこの時期，どうしても憎悪と怨恨に曇らされがちな人々の節度をめざめさせるのに何らかの助けとなったことも否定できないであろう。フォイヒトヴァンガーを，まさにいい意味においても悪い意味においても，ウルトラオプティミストと呼ぶ所以である。　　（1986年5月16日脱稿）

＜付　記＞

本文中でも述べたように，『成功』はクツナー＝ヒトラーをめぐる物語に終始するものではなく，あくまでマルティン・クリューガーという美術史

家の冤罪裁判を中心にした「バイエルンの国の運命」をテーマとする小説である。こういう文学作品『成功』全体のインタープレタツィオーンは，また次の機会に試みたいと考えている。

註

1) Lion Feuchtwanger: Der Film "Potemkin" und mein Buch "Erfolg", unpubliziertes Manuskript, 1936, im Besitz von Marta Feuchtwanger, in: TEXT+KRITIK 79/80 Lion Feuchtwanger, Hrsg. H. L. Arnold, 1983, S. 73f.
2) Lion Feuchtwanger: Mein Roman "Erfolg", 1931, in: Ein Buch nur für meine Freunde, Fischer Taschenbuch Verlag 1984, S. 388.
3) Reinhart Hoffmeister: Schatten über München, Langen Müller 1981, S. 46.
4) Lion Feuchtwanger: Erfolg, Fischer Taschenbuch Verlag 1975, S. 486.
5) Ebenda, S. 198.
6)『私の小説「成功」』(註2参照 S.388.)の中でフォイヒトヴァンガーは次のように述べている。「現代のドイツの小説作家として，私は一人の主人公やあるいは一人の女主人公に興味はない。この小説のために私は，一人の個人ではなく人物たちのグループを選んだ。一つのグループを形成する人物たちの8人が，まあ言うなら，他の人物たちより上位に位置している」。
7) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 420.
8) Ebenda, S. 698.
9) Hilde Waldo: Lion Feuchtwanger: A Biography, in: Lion Feuchtwanger, The Man, His Ideas, His Work, Ed. J.M.Spalek, Hennessey & Ingalls 1972, p. 10.
10) Egon Brückener u. Klaus Modick: Lion Feuchtwangers Roman "Erfolg", Scriptor Verlag 1978. ---Wilhelm von Sternburg: Lion Feuchtwanger, Ein deutsches Schriftstellerleben, Athenäum Verlag 1984. ---Joseph Pischel: Lion Feuchtwanger, Versuch über Leben und Werk, Verlag Philipp Reclam 1976.
11) Wilhelm von Sternburg, a.a.O., S. 216.
12) E.Brückener u. K.Modick, a.a.O., S. 141.
13) 平井正『ベルリン 1928－1933 破局と転換の時代』(せりか書房 1982年) 参照。
14) 長橋芙美子『言葉の力で－ドイツの反ファシズム作家たち－』(新日本出版社 1982年) の中の『収容所で虐殺された詩人ミューザーム』参照。
15) Gerhard Schreiber: Hitler, Interpretation 1923－1983, Wissenschaftliche

Buchgesellschaft 1984, S. 43.

16) Marta Feuchtwanger: Nur eine Frau, Jahre Tage Stunden, Langen Müller 1983, S. 155.

17) Ebenda, S. 155.

18) Ebenda, S. 154.

19) 1905年9月7日ベルリーンでS・ヤーコプゾーンによって創刊された雑誌『Schaubühne』を母体とする。同誌は1908年，同年新進の劇評家フォイヒトヴァンガーによってトーマス・マン，ヴァッサーマン，マックス・ハルベらを寄稿者として15冊刊行されていたミュンヒェンの雑誌『Spiegel』を吸収合併する。フォイヒトヴァンガーは当然『Schaubühne』の主要な寄稿者の一人になるわけである。同誌は，1918年4月4日号から，以前の演劇専門雑誌ではなく，「政治・芸術・経済のための週刊誌」として名前も『Weltbühne』と変えて発刊されるが，編集者は依然としてヤーコプゾーンであった。1926年からは，後に1938年強制収容所で虐殺されることになるあのノーベル平和賞受賞者カール・フォン・オシエツキーが編集者となる。1932年5月10日彼が同誌に載せた記事のことで最初に刑務所に入れられた時，彼を刑務所の門の所まで見送った100人あまりの人々の中には，フォイヒトヴァンガーもいた。同誌は1933年からは亡命雑誌『Neue Weltbühne』としてプラハで刊行を続けられている。

20) "Die Weltbühne", Vollständiger Nachdruck der Jahrgänge 1918−1933, Athenäum Verlag 1978, S. 465 f.

21) "Putsch, Peitsche und Zucker", in der: Weltbühne, a.a.O., 15. November 1923, S. 485−488. ––– "Kahr−Hitler−Ludendorff", in der: Weltbühne, a.a.O., 3. April 1924, S. 432−434. ––– "Zeigner und Hitler" von Jacob Altmaier, in der: Weltbühne, a.a.O., 10. April 1924, S. 463−467.

22) "Hitler−Prozeβ" von L. Lania, in der: Weltbühne, a.a.O., 6. März 1924, S. 298−301.

23) 註13参照。

24) ジョン・トーランド『アドルフ・ヒトラー』（永井淳訳，集英社　1979年）。

25) 1番大きな違いは，『成功』においてはレーム大尉らの別部隊の行動があまり描かれていない点である。

26) Marta Feuchtwanger: Nur eine Frau, a.a.O., S. 154.

27) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 131.

28) イリア・エレンブルグ『わが回想』（木村浩訳，朝日新聞社　1968年）。69頁。

29) イリア・エレンブルグ，前掲書69−70頁。

30) セバスチャン・ハフナー『ヒトラーとは何か（Anmerkungen zu Hitler）』（赤羽龍夫訳，草思社　1979年）参照。

31) 註22参照。

32) 註21参照。

33) Vgl. Hans Mayer: Lion Feuchtwanger oder Die Folgen des Exils, in Neue Rundschau, 1965, S. 120f.

34) 『ユダヤ人ジュース』は当初，その長さやユダヤ人問題という微妙なテーマに関係するためもあって，なかなか出版社が見つからなかった。1925年3月にようやくドライ・マスケン書店から出版されたがドイツでは売れゆきはそれほどよくなかった。ところが，この本がふとしたことでアメリカの出版者でバイキングプレス社長のベン・ヒュープシュの目にとまり，『権力（Power）』という題名で1926年10月にアメリカで出版されると，たちまちベストセラーになった。1ケ月後にロンドンのマーティン・ゼッカー社から出版された版もイギリスで大成功をおさめる。フォイヒトヴァンガーは当初，ドイツ国内でよりもむしろ世界で有名になったわけである。とりわけアメリカでの大成功は，後にこの作家が亡命中に，親ソヴィエト的な態度をとっていたにもかかわらず，アメリカに歓迎して迎え入れられる大きな理由の一つになったと思われる。なお，もちろん外国でのこういう成功はドイツ国内にも影響を与え，『ユダヤ人ジュース』は1931年7月までにドイツ国内だけでも10万部売れている。

35) Marta Feuchtwanger: Nur eine Frau, a.a.O., S. 123.

36) Ebenda, S. 141f.

37) 「フォイヒトヴァンガーは，数少ない私の師の一人である。彼を通じて私は，私がどういう美学法則を犯しつつあるのかを知った」Bertolt Brecht: Gruß an Feuchtwanger, in: Gesammelte Werke 19, Suhrkamp Verlag 1967, S. 488.

38) Lion Feuchtwanger: Das Haus der Desdemona, in: Lion Feuchtwanger, Ein deutsches Schriftstellerleben, von Sternburg, a.a.O., S. 168f.

39) Marta Feuchtwanger: Nur eine Frau, a.a.O., S. 6.

40) Wolfgang Jeske u. Peter Zahn: Lion Feuchtwanger oder der arge Weg der Erkenntnis, J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung 1984. ---Wilhelm von Sternburg: Lion Feuchtwanger, Ein deutsches Schriftstellerleben, a.a.O.

41) Joseph Pischel: Lion Feuchtwanger, a.a.O.

42) Lion Feuchtwanger: Versuch einer Selbstbiographie, 1927, in: Ein Buch nur für meine Freunde, a.a.O., S. 354.

43) Vgl. Wilhelm von Sternburg: Lion Feuchtwanger, a.a.O., S. 156-160.

44) Lion Feuchtwanger: Thomas Wendt, 1918-1919, in: Stücke in Prosa, Greifenverlag 1959, S. 369-494.

45) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 209.

46) Ebenda, S. 238.

47) Vgl. E.Brückener u. K.Modick: Lion Feuchtwangers Roman "Erfolg", a.a.O., S. 38-44.

48) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 138.

49) Ebenda, S. 47.

50) Joseph Pischel: Lion Feuchtwanger, a.a.O., S. 85.

51) 「地球が階級闘争に引き裂かれていたというのに，この上なく激しい世界の変転の一方で，死に絶えつつある社会のちっぽけでくだらない感情にしがみついていることに，サナトリウムや冬の保養地文学をつくることに意味があっただろうか？」。これは事実誤認と言わなければならないが，このプレックル＝ブレヒトが口にする「サナトリウム文学」には当然，トーマス・マンの『魔の山』のことが踏まえられていると思われる。
Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 248.
「いずれにせよ彼（プレックル）にとって，もし画家ラントホルツァーのように精神分裂病に落ち入りたくなければ，唯一のよりどころは，実践的で現実化されたマルクシズムのただ中の生活しかなかった」。Ebenda, S. 742.

52) Joseph Pischel: Lion Feuchtwanger, a.a.O., S. 85.

53) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 345 f.

54) フォイヒトヴァンガーは，若い時からゴヤに非常に興味をもっていた。小説『ゴヤあるいは認識のきびしい道』はそういう彼の関心と研究の一つの結晶といえる。

55) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 148.

56) Ebenda, S. 761.

57) Ebenda, S. 241.

58) 長橋芙美子『雑誌「ダス・ヴォルト」とL・フォイヒトヴァンガー』（『希土』第2号 1971年），後『言葉の力で』（註14参照）に再録。

59) Hans－Albert Walter: Deutsche Exilliteratur 1933－1950, Band 4 Exilpresse, J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung 1978. ---David Pike: Deutsche Schriftsteller im sowjetischen Exil 1933－1945, Suhrkamp Verlag 1981.

60) H.A.Walter: Exilpresse, a.a.O., S. 466 f.

61) ようやく1938年10月号にベッヒャーの作品に対する彼の書評が載った。しかし，これが唯一の例外で，その後も『ダス・ヴォルト』に彼は何も寄稿していない。David Pike: Deutsche Schriftsteller im sowjetischen Exil 1933－1945, a.a.O., S. 280 u. 303.

62) Ebenda, S. 235.

63) Ebenda, S. 234.

64) Lion Feuchtwanger: Der Ästhet in der Sowjetunion, in: Ein Buch nur für meine Freunde, a.a.O., S. 505－508.

65) 第(5)章参照。ただし，出版・読書界で彼が完全に忘れさられていたとはいえ，一部では公式に彼の名誉回復がはかられている。たとえば，1952年11月にミュンヒェン大学が，1933年に剥奪した博士号を再び彼に授与している。

66) Alfred Döblin; Briefe, Walter－Verlag 1970, S. 256.
67) Klaus Modick: Lion Feuchtwanger im Kontext der zwanziger Jahre, Scriptor Verlag 1981, S. 9.
68) Lothar Kahn: Lion Feuchtwanger, übersetzt aus dem Englischen ins Deutsche von Brigitta Strelka, in: Deutsche Exilliteratur seit 1933 Band 1 Kalifornien, Hrsg. John M. Spalek u. Joseph Strelka, Franke Verlag 1976, S. 331－351.
69) Hermann Kesten an Franz Schoenberner, 8. Januar 1947, in: Deutsche Exilliteratur seit 1933, a.a.O., S. 336f.
70) Thomas Mann an Otto Basler, 23. September 1946, Thomas Mann Briefe 1937－1947, S. Fischer Verlag 1963.－－－ルードウィヒ・マルクーゼ『わが20世紀』(西義之訳, ダイヤモンド社 1975年), 304頁。
71) Lothar Kahn: Lion Feuchtwanger, a.a.O., S. 338f.
72) Ebenda, S. 339. Hilde Waldo: Lion Feuchtwanger, a.a.O., S. 17.
73) Lothar Kahn: Lion Feuchtwanger, a.a.O., S. 339.
74) ルードウィヒ・マルクーゼ, 前掲書 294頁。
75) 註 34 参照。
76) Reinhart Hoffmeister: Schatten über München, a.a.O., S. 21.
77) Hermann Weber: Kommunismus in Deutschland 1918－1945, Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1983, S. 114f.
78) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 597.
79) Ebenda, S. 212.
80) Ebenda, S. 611.
81) E. Brückener u. K. Modick: Lion Feuchtwangers Roman "Erfolg", a.a.O., S. 154f.
82) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 729.
83) Wolfgang Müller－Funk: Der Erfolg der Sinngebung oder: die List der Vernunft, in: TEXT＋KRITIK 79/80 Lion Feuchtwanger, a.a.O., S. 56.
84) 註 21 参照。
85) Marta Feuchtwanger: Nur eine Frau, a.a.O., S. 154.
86) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 544.
87) E. Brückener u. K. Modick: Lion Feuchtwangers Roman "Erfolg", a.a.O., S. 158.
88) Lion Feuchtwanger: Erfolg, a.a.O., S. 535.
89) Ebenda, S. 327.
90) Ebenda, S. 473.

91) Ebenda, S. 488.

92) Ebenda, S. 486.

93) Ebenda, S. 648

94) Klaus Modick: Lion Feuchtwanger im Kontext der zwanziger Jahre, a.a.O., S. 8.

95) Hans Mayer: Lion Feuchtwanger oder Die Folgen des Exils, a.a.O., S. 128.

96) ディールゼンは，フォイヒトヴァンガーの「その国家的重要性の全容が次の時代になってはじめて証明された，そして彼以外には，批判的リアリズムの作家にしろ社会主義の作家にしろまだ誰も取り組んでいなかった素材に取りかかった功績」を認めながらも，「フォイヒトヴァンガーもまた，ファシズムの危険を軽くあしらうという傾向を『成功』において示している」としている。Inge Diersen: Seghers－Studien, Rütten & Loening 1965, S. 134.

97) たとえば，1942年2月28日には次のように書かれている。「まさに市民的なものであるフォイヒトヴァンガーの考えは，宣伝的な立場からみても歴史的な立場からみても意義のないもののように私には思われる。ヒトラーを特に能力のない者として，奇形，倒錯，ペテン，特別に病的な事例として評価し，他の市民的な政治家たちを範例，到達できなかった範例として彼の前につきつけることによっては，ヒトラーと戦えない」。
Bertolt Brecht: Arbeitsjournal, Erster Band 1938 bis 1942, Suhrkamp Verlag 1973, S. 380.

98) Lion Feuchtwanger: Exil, Aufbau－Verlag 1974, S. 787.

99) Ebenda, S. 790f.

100) Lothar Kahn: Lion Feuchtwanger, a.a.O., S. 331.

101) Ebenda, S. 337.